

研究ノート

総合経営学科2020年度及び2019年度入学生に対する基礎学力 e-learning システムの学修効果の解析

矢崎 久・室谷 心・上條 直哉

An Analysis of the Learning Effects of the e-Learning System for Remedial Academic Skills for Students Entering the Department of Comprehensive Management in the 2020 and 2019 Academic Years

YAZAKI Hisashi, MUROYA Shin and KAMIJO Naoya

要 旨

松本大学総合経営学部総合経営学科では、教育企画として学科1年生に対して、教養教育のためのe-learning システムを導入している。昨年度の資料に続いて2020年度入学生のe-learning システム利用の結果をここに報告する。さらにIRの視点から、入試区分、高校課程、GPA、学修行動調査と合わせた分析を行い、2020年度入学生の1年次の成績との関係を議論した。また、昨年度報告した2019年度入学生に関しては2年次の成績との比較を行った。

キーワード

e-learning 初年次教育 IR 学修行動調査

目 次

- I. はじめに
- II. ドリルの利用実績
- III. 学力テスト結果の比較
- IV. 大学の成績、入試区分、高校課程本大学学修行動調査などとの関係
- V. まとめ

注

文献

I. はじめに：基礎ゼミとe-learningシステムの導入経緯

松本大学総合経営学部総合経営学科には、入学年次に必修科目「基礎ゼミナールⅠ」(前期科目)「基礎ゼミナールⅡ」(後期科目)(以下あわせて「基礎ゼミ」と略記する)が配置されている。1クラスあたり20名程度の学生に分かれ、クラス替えない必修科目なので、学生にとっては“通年必修「1年ゼミ」”という雰囲気、本学科では1クラスにつき専任教員2名が半期で正・副担当を交代するシステムをとっている。従来は専門科目が配置されている学年まで出会うことのなかった学科教員と学科学生が早期に出会い、互いを知ることにより、学びの環境変化により直面する学修上あるいは日常生活上の諸問題に応じる場となることが期待されている。

本学の入学初年次の教育目標には、大学での学修スタイルへの習熟があげられており、多くの学科で初年次のゼミの内容として、グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション、資料収集、レポー

ト作成などが採用されている¹⁾。2018年度より、総合経営学科では学科教育企画として教養教育のためのe-learningシステムが導入された²⁾。このシステムはラインズ株式会社のラインズドリル³⁾で、「基礎ゼミ」の一環として運用している。

また、本学科では、近年の入試制度の多様化の結果として、高等学校普通科課程や総合科課程出身の学生に加えて、商業科や工業科といった実業系の課程を修めた生徒が少なからず入学してきている。このため入学者の入学時点での学力のばらつきも生じ、義務教育から高校基礎段階のリメディアル教育を必要とする学生とそうではない学生の混在する状況があり、初年次教育の目標として基礎学力の強化も議論の俎上に上がることも多い。

総合経営学科では、基礎学力要請を目指し学科企画として「基礎ゼミ」の授業においてこのe-learningシステムを導入したが、具体的な運用としては、このシステムによる学修^{注1)}の達成度を平常点の20%程度に組み込むということを学生に告知し、あとは、課題消化の度合いの確認実績を定期的に学生に告知するという形態で統一した。学生への具体的な告知

図1. 学生配布ちらし(表面)

図2. 学生配布ちらし(裏面)

の在り方は各教員にゆだねている。毎週の授業時間は、先に上げた、グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション、資料収集、レポート作成の練習をこなすことが主で、このドリルが基礎ゼミの中心ではない。ラインズドリルの本学での利用にあたっては、「松大ドリル」という名称で利用することにした(図1・図2)。

ラインズドリルは英国数理社の5教科についてベーシックコースとスタンダードコースがあり、それぞれ各教科が「6分野×5ステップ」に分かれていてドリルと分野ごとの確認テストで構成されている。ドリルも確認テストも1回の内容は5分程度で終わる分量であり、内容は毎回ランダムに変化する。ブラウザで利用でき、スマートフォンにもパソコンにも対応している。ドリルの詳細は昨年資料²⁾および、ラインズドリルのホームページ³⁾を参照のこと。

ラインズドリルを利用している他の大学では、5教科すべての分野で100点を取るまで続けさせている例もあるようであるが、本学科では、教科を英・国・数の3教科に絞り、各分野は80点以上で合格という課題設定とした。

周知の方法は、2018年度は全体での利用ガイダンスのみであったが、利用実績の向上を目指して学生・教員双方への周知を図るために、2019年度はガイダンス、プレテスト(1回目学力テスト)およびポストテスト(2回目学力テスト)を、学生を一堂に集めて行った。2020年度は新型コロナウイルス感染症対策により大学の前期授業がすべてオンライン形式となったことから、オンラインクラスで利用法の説

明を行い、プレテストは5月12日(火)～6月30日(火)までを期間とした学生の自習の形で行った。後期はオンライン形式と対面式の併用となったので、2021年1月5日(火)に一堂に集まり教室で行った。

Ⅱ. ドリルの利用実績

2019年、2020年両年度とも、基礎ゼミの前期にベーシックコース、後期にスタンダードコースを課し、前期のスタンダードコースと後期のベーシックコースの利用は任意とした。e-learningシステム導入にあたって一番の問題は、学生の利用率であり費用に見合っただけの学生の利用がなされるかどうか、企画段階での一番の心配であった²⁾。他の大学でも事情は同様で、利用率を上げるために学習実績を成績と連動させたり、授業の時間内で利用させたりする工夫がなされている。

表1は松大ドリルの両年度の利用状況である。前期のベーシックコースの利用では、導入初年度の2018年度は学生数92名中ログインした91名のログイン回数は535回、平均ログイン回数は5.9回であった。2019年度の学生101人のログイン回数は885回で平均8.8回、2020年度は99人、ログイン回数887回、平均9回であり、年度を追うごとに学生の平均利用回数が上昇している。制度導入初年度の2018年度は、ベーシックコースの利用も少なく、スタンダードコースについては利用が非常に少なかった。利用度の上昇は「基礎ゼミ」における松大ドリルを用いた学修システムが定着していることを示している。

ベーシックコースについて、5教科の学習回数と学習時間をグラフにすると、図3から図6のようになる。学習回数は延べのログイン回数であり、学習時間を参加学生数で割ったものが平均時間である。図から国語は回数が多く数学には特に時間をかけていることがわかる。また課題としては課していない社会と理科に取り掛かっている学生の存在も見られる。2020年度の結果を2019年度と比べると、教科ごとの違いの傾向は同じであるが、学習回数も学習時間も2020年度の方が増加している。2020年度は特に数学の学習回数が増加し学習時間も長くなっている。

課題とした分野ごとの実力診断テストの実施率と達成率(80点以上を達成)が図7である。2019年度までは、国語に比べて英語と数学の実施率や達成率の

表1 松大ドリル利用実績 ※ログイン回数

2019年度	ベーシックコース	スタンダードコース
前期	885回	52回
後期	247回	550回
合計	1132回	602回
2020年度	ベーシックコース	スタンダードコース
前期	887回	91回
後期	127回	1015回
合計	1014回	1106回

低さ、分野ごとの率の高低がみられ、本学科学生の得手不得手が結果に反映されているものと思われた。しかし2020年度では、国語、英語、数学のいずれも達成率は90%を超え、分野ごとの実施率や達成率の高低差も少なかった。特に教科に対する苦手意識の存在は見えなくなっている。

実施率と達成率の差は、実力診断テストに着手しても目標として設定した80点を超えられずに終わった学生の比率であるが、これまで見受けられた実施率と達成率の高低、分野ごとの率は、2020年度はこれまでとは大きく異なり、着手した分野の実力診断

テストは80点を達成できるまで頑張ることができた学生が多かったことを示している。この点は、図6で見られた数学をはじめとする2020年度の学習時間の増加と整合する。

この変化の原因としては、新型コロナウイルス感染症対策によって、大学で対面授業ができなくなり全面的にオンライン授業が導入されたことによる、オンライン学習システムに対する慣れや在宅時間の増加といった側面が考えられる。また、課題に学生が取り組むように促す教員側の工夫もあった可能性が考えられる。実際、2020年度より基礎ゼミを新た

教科別学習回数
(テスト+ドリル)

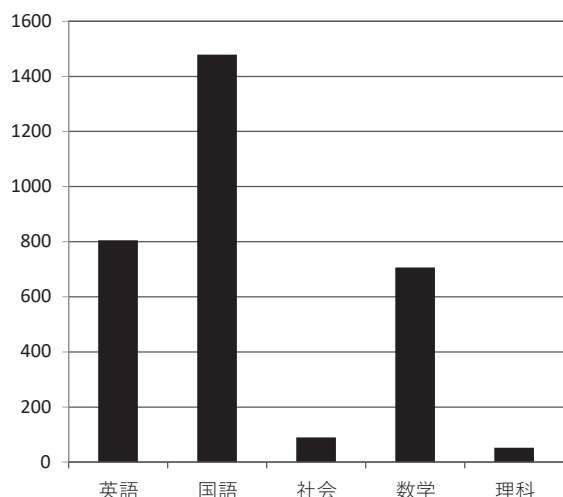


図3. ベーシックコース学習回数(2019)

教科別平均学習時間 (分)

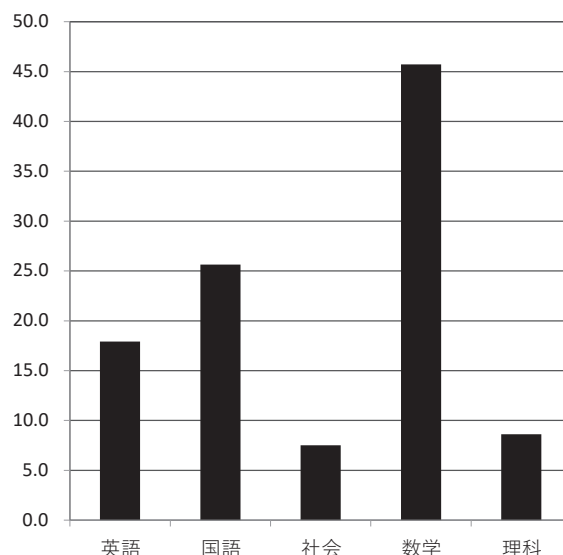


図4. ベーシックコース学習時間(2019)

教科別学習回数
(テスト+ドリル)

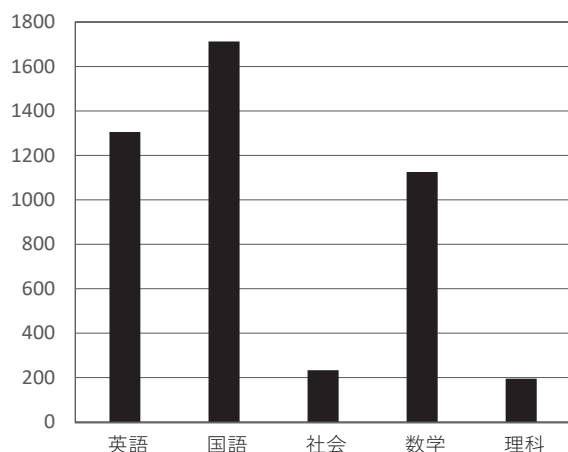


図5. ベーシックコース学習回数(2020)

教科別平均学習時間 (分)
(テスト+ドリル)

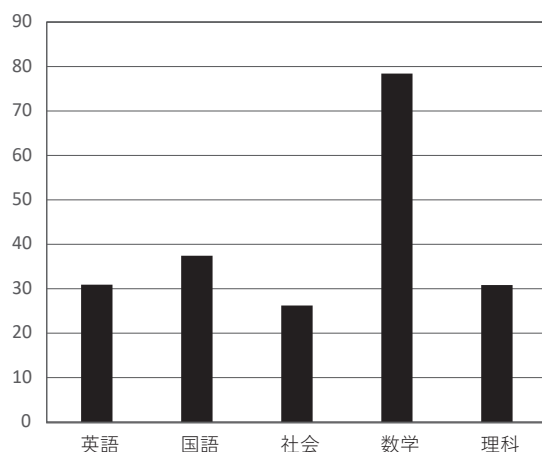


図6. ベーシックコース学習時間(2020)

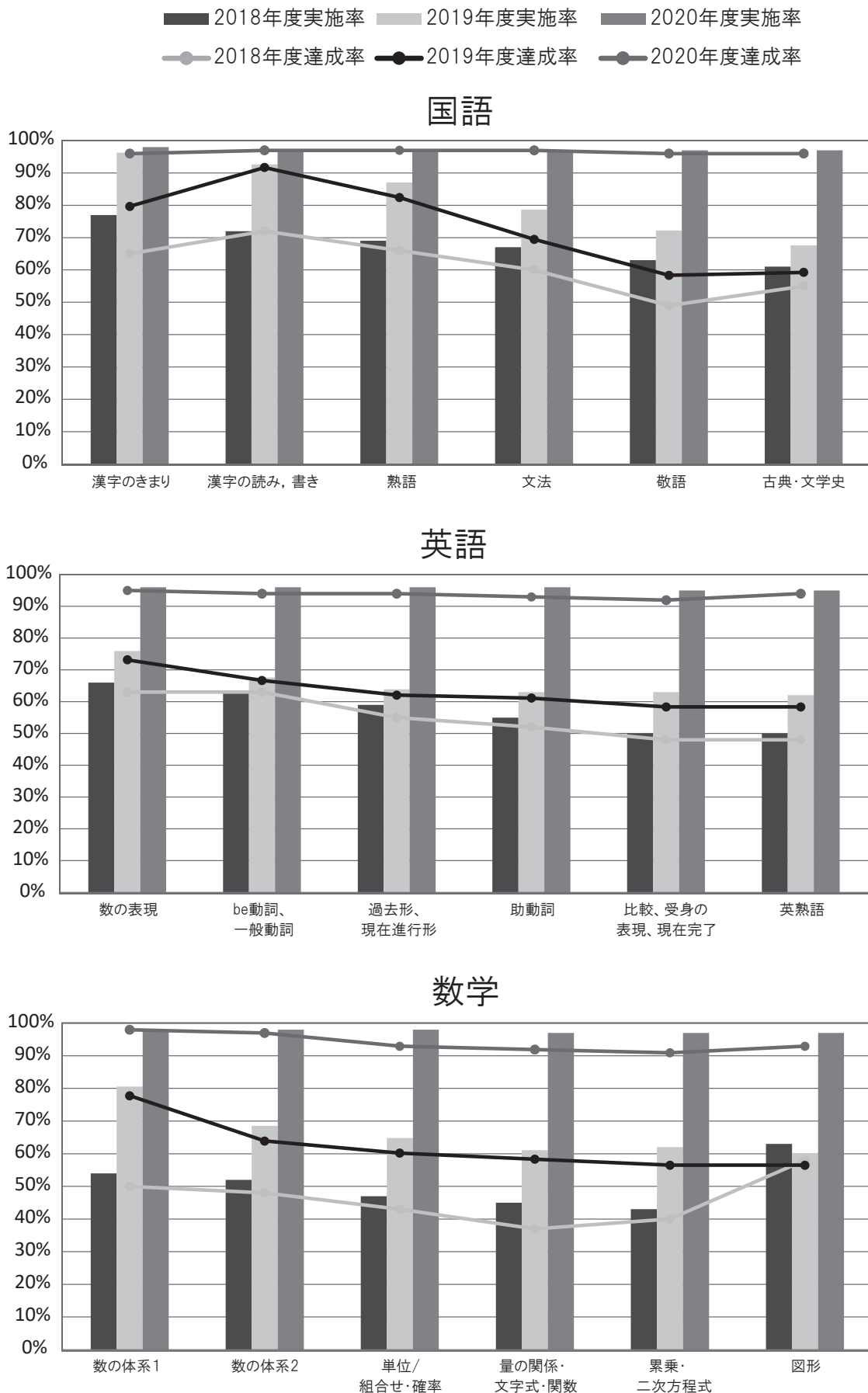


図7. 実施率と達成率(過去3年間の比較)

に担当したある教員にクラス運営の方針を聞いてみたところ、

- ・数学は就活試験のSPI対策にもなるので熱心に取り組むよう指導した。
- ・一定の課題を期限内に終了させる力はとても重要なので、そのような能力の養成だと思って取り組むよう指導した。
- ・定期的実施状況をクラスで報告することにより、早めに全ての課題を実施する雰囲気づくりを行った。

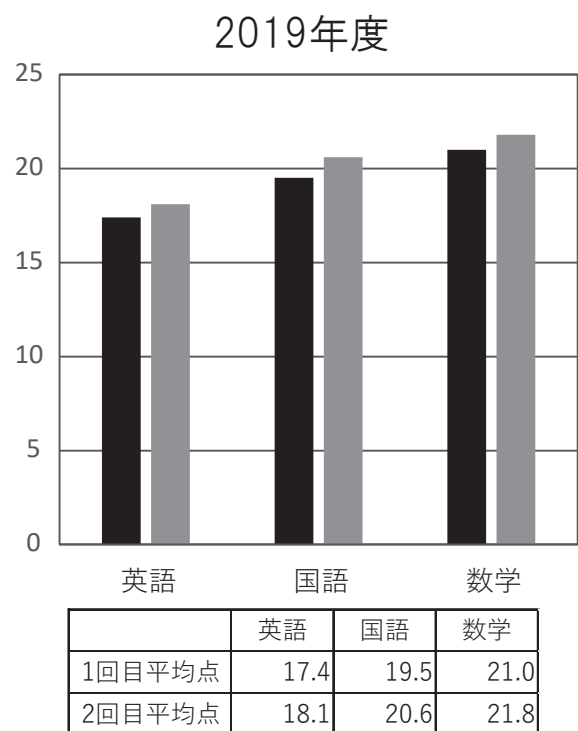
という、学生へのアナウンスの際の心がけを答えている。また、基礎ゼミ担当教員のうちの幹事役の教員の交代により、学生対応のきめ細かさにも変化があった。

本学科学生の不得手科目だと思われた国語以外の科目についての取り組みを促すためには、このドリルは将来就職につながるSPI対策にもなることや、期限内に一定の課題を終了させるという態度は社会において重要となることなどを基礎ゼミの場で告知することも、課題への取り組みを促進させるポイントであるかもしれない。

Ⅲ. 学力テスト結果の比較

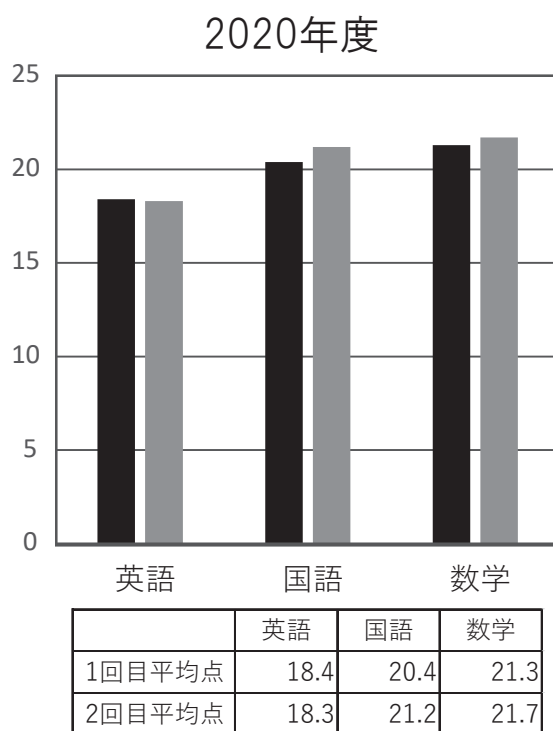
図8はプレとポストの2回の基礎学力テストの結果である。2020年度の結果も国語・数学の2教科でプレテストからポストテストにかけて平均点が上昇してはいる。しかしながら2019年度に見受けられた平均点の上昇傾向は2020年度には弱くなり、国語と数学にしか見られなかった。英語に関しては、微量であるが減少している。この結果に関しては、2020年度はプレテストの段階で学生の得点が高く、すでに昨年ポストテストと同じレベルに達していたために、得点の上昇する余地が少なかったことが原因の一つとして考えられる。2019年度と2020年度でポストテストの結果を比べると、国語は少し上がっており、英語と数学はほぼ一致している。

2019年度はプレテストに際して全学生を一教室に集めてシステムの解説と同時に実施したが、2020年度は期間を設定し各自で行った。このため、テストシステムへの習熟とプレテストに向き合う真摯さが年度間の違いの要因として生じた可能性もある。この場合には、2019年度のプレ・ポストのテスト間の得点の上昇が本当に“学力”の上昇で



■ 1回目平均点 ■ 2回目平均点

図8. 基礎学力テストの結果(2019)



■ 1回目平均点 ■ 2回目平均点

(2020)

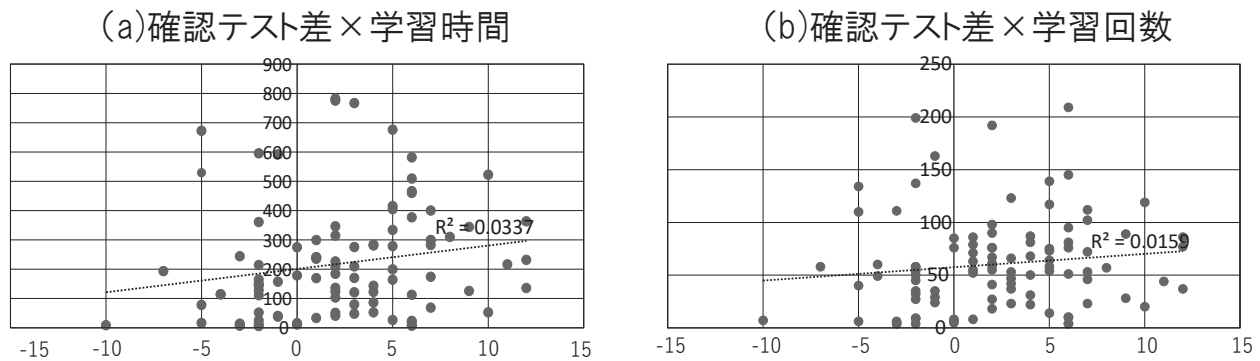


図9. 学力テストの得点変化と学習時間(a)および学習回数(b)の散布図(2019)

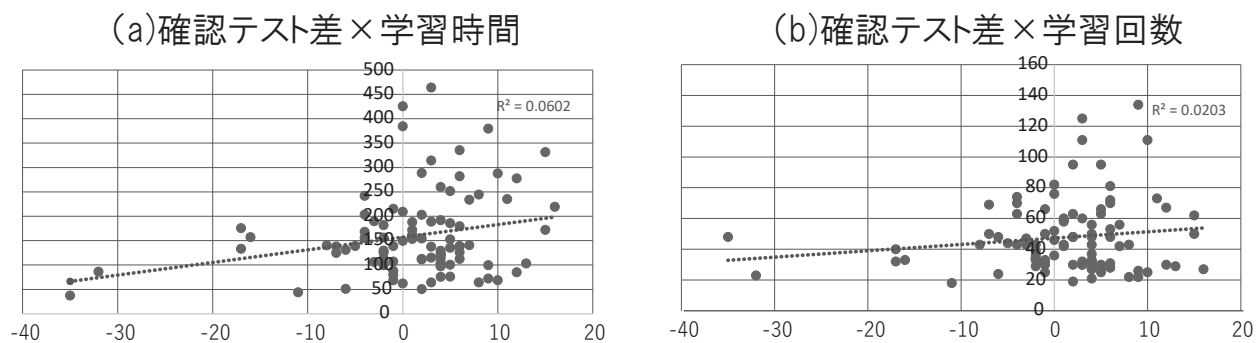


図10. 学力テストの得点変化と学習時間(a)および学習回数(b)の散布図(2020)

あったかどうかを丁寧に検討する必要がある。

本年度も上昇している国語や数学に関しては、特に該当する科目は本学にはなく、このドリルの存在と日常生活での成長ぐらしか特に原因となるものはない。英語に関しては1年生の半期の必修科目「総合英語」があり、全学的に導入している英語のe-learningシステムの「総合英語」や「TOEIC I」「TOEIC II」といった授業での活用もあるので、当然上昇することを期待したいが、英語のe-learningシステムの活用実績も明らかではなく、また受験勉強の終わった後の新入生の1年間の学修については、一筋縄ではいかないというのが教員サイドの肌感覚であり、他大学のデータにもみられる。

ドリルの学習成果について、確認テストの得点増加と学習時間や学習回数との相関を取ってみたが明白な結果は得られなかった(図9・10)。ばらつきは大きく r^2 の値は小さいが、その傾向は分布の中に見て取れるように、回帰直線は緩やかな右上がりの直線となる。

IV. 大学の成績、入試区分、高校課程本大学学修行動調査などとの関係

大学学内データの活用(Institutional Research、以下IRと略記する)の一環として、入学時のテスト結果と、その後の学修行動調査結果、GPAなどとの比較を行っている。

表2は昨年入学生として報告した2019年度入学生が2年次に修めたGPAとの間の相関である。表中では0.4よりも大きな相関係数は太文字にしている。この表の主な特徴については、昨年すでに報告した。本ノートでのこの表のオリジナルの点は2年次GPAで、1年次GPAと2年次GPA間の相関は0.73と高かった。昨年報告した1年次GPA同様に、2年次GPAは1年次入学時のテストやe-learningシステムのプレ・ポストのテストとの間の相関は、さほど高いものではない。

正の相関があるので“学力”というくくりでは同質の量を測っているとは考えられるが、大学の成績

(GPA)と単純な学力テストとは直結したものではない可能性が考えられる。2年次のGPAと英語とは比較的相関が強かった。

表3は2019年度入学生の松本大学学修行動調査の結果と高校時の学修状況および両年度の大学GPAとの間の相関である。大学欠席回数とGPAには負の相関という自然な結果が表れている。高校欠席回数と大きな相関のある項目はなく大学欠席回数との相関は0.2であった。高校評定値は入学時テストとの相関は見られないが大学GPAと相関がみられる。従って、評定値とGPAは同種であるが、この2つは3教科の基礎学力とは違った学力の物差しである可能性を示唆することは表2で述べたことと整合している。

表4は2019年度と2020年度の学修行動調査の結果と松大ドリルの学力テストの間の相関である。2019年度では時間外学習時間とポストテスト国語および数学達成度との間に0.3程度の正の相関、大学欠席回数と学習回数、学習時間との間に-0.3程度の負の相関がみられた。

2020年度では時間外学習時間とポストテストの英語に0.3の正の相関、バイト時間と3教科の単元のすべておよびバイト時間とポストテストの数学、学習時間と3教科の達成度との間に負の相関がみられた。これらの負の相関は、極めて自然な結果といえる。大学欠席回数とドリル学修達成度の間の負の相関というのも自然な結果であろう。

総合経営学科2019年度の入試の状況は文献の2)で報告したように、指定校以外の区分では3倍から5倍程度の倍率であった。表5は総合経営学部の2020年度の入試の状況であり、総合経営学科における平均倍率は4.4倍であった。

表6は2019年度入学生の学修行動調査の他の項目と松大ドリルの学修結果、区分ごとの両年度のGPAをまとめたものである。表中の「全クリ割合」とは、課題をすべて終了した学生の割合である。2019年度は女子学生の方が男子学生と比べて学習時間が長く、成績の上昇が大きく、課題をすべてクリアした学生の割合も大きかった。本学への進学が第一希望だった学生と第一希望以外であった学生を比べると、学習時間は第一希望の学生の方が長い、得点は第一希望以外の学生の方が高く2回のテストでの得点の伸びも大きい。入試区分で見ると、学習

時間は指定校入試の学生が長い、得点は一般入試の学生が最も高く、2回のテストでの得点の伸びも一般入試の学生の方が大きかった。2020年度では、男子学生の方が女子学生と比べて学習時間が長い、成績は女子学生の方が男子学生に比べて伸びている。学習時間は第一志望の学生が長く2回のテストでの得点の伸びも第一志望の学生が大きい。GPAでは、女子学生の方が男子学生と比べて2年次の上昇が見られ、高校課程別では商業科の2年次の上昇が見られたほかにはGPAはいずれも低下している。入学後の緊張感からも次第に解放され、学修環境の変化にも慣れ、専門科目の履修も増えてくるなどの理由が考えられるが、これでは商業科出身学生のGPA上昇を説明することはできない。

図11は入試区分ごとの学力テスト結果である。横軸に1回目(プレ)縦軸が2回目(ポスト)の3教科合計点である。一般入試および大学入学共通テスト利用入試の学生は、両年度ともに得点が高い傾向にある。2020年度も高得点領域で得点を増加させている一般入試学生が多い。また、2020年度はポストテストで大幅な得点減少を示した学生が存在することも目立つ。大学での学修意欲低下のシグナルである可能性として学生個人を特定して調べる必要があるのかもしれない。

図12は、本学への入学が第一希望かどうか、それぞれの学習時間、学習回数の分布であるが、上方や右側に広く分布するよう勉強する学生は第一希望の学生に多いことがうかがえる。

図13は、大学志望希望別のプレ・ポストテストの結果である。両年度とも全体に第一希望ではない層にいうところの“不本意入学”の学生が高得点側に分布している。第一希望であっても第一希望以外の学生であっても、斜めの直線よりも上に多く分布し、ポストテストにおいてプレテストよりも良い点を取った学生が多いということは、第一希望かどうかによらず、大学における学修活動を行っているという良い結果である。

図14は男女別の学習回数と学習時間の分布である。2019年度は中心付近の女子学生が目立ち女子の学習量が多いことがうかがえる結果であったが、2020年度は男子学生の学習時間と学習回数の伸びがみられた。図15は男女別のプレ・ポストテストの結果である。2019年度は女子に高得点者が多い傾向に

表2 入学時テスト、1年次と2年次GPAと松大ドリルの学力テストとの相関

	1年前期GPA	1年後期GPA	1年GPA	2年GPA	2年GPA - 1年GPA	入学時テスト(国)	入学時テスト(英)	入学時テスト(数)	入学時テスト(合計)	入学時テスト(国語)	入学時テスト(数学)	入学時テスト(英語)	入学時テスト(合計)	プレテスト(国語)	プレテスト(数学)	プレテスト(英語)	プレテスト(合計)	ポストテスト(国語)	ポストテスト(数学)	ポストテスト(英語)	ポストテスト(合計)	学習回数	学習時間	英語達成度	国語達成度	数学達成度	達成度合計	ポストブレ差
1年前期GPA	0.66	0.66	0.89	0.66	-0.27	0.31	0.34	0.49	0.39	0.28	0.24	0.44	0.41	0.38	0.28	0.50	0.51	0.12	0.19	0.28	0.24	0.30	0.30	0.24	0.30	0.30	0.30	0.11
1年後期GPA	0.66	0.66	0.93	0.66	-0.32	0.18	0.33	0.31	0.33	0.23	0.28	0.27	0.33	0.25	0.27	0.35	0.38	0.31	0.32	0.39	0.34	0.44	0.42	0.34	0.44	0.42	0.42	0.05
1年GPA	0.89	0.93	0.73	0.66	-0.33	0.26	0.37	0.43	0.39	0.28	0.29	0.39	0.40	0.34	0.30	0.45	0.48	0.25	0.29	0.37	0.32	0.42	0.40	0.32	0.42	0.40	0.08	
2年GPA	0.66	0.66	0.73	0.66	0.41	0.17	0.38	0.46	0.36	0.23	0.32	0.38	0.39	0.26	0.21	0.43	0.40	0.06	0.05	0.23	0.23	0.28	0.27	0.23	0.28	0.27	-0.02	
2年GPA - 1年GPA	-0.27	-0.32	-0.33	0.41	-0.10	-0.10	0.03	0.07	-0.04	-0.07	0.03	-0.02	-0.02	-0.11	-0.13	-0.05	-0.11	-0.26	-0.32	-0.18	-0.11	-0.16	-0.17	-0.16	-0.17	-0.17	-0.13	
入学時テスト(国)	0.31	0.18	0.26	0.17	-0.10	0.28	0.37	0.62	0.37	0.60	0.31	0.25	0.46	0.50	0.30	0.33	0.45	-0.19	-0.05	0.05	0.24	0.12	0.13	0.05	0.24	0.12	0.13	-0.12
入学時テスト(数)	0.34	0.33	0.37	0.38	0.03	0.28	0.61	0.90	0.61	0.45	0.66	0.60	0.72	0.26	0.65	0.59	0.68	0.01	0.05	0.14	0.08	0.27	0.18	0.08	0.27	0.18	-0.12	
入学時テスト(英)	0.49	0.31	0.43	0.46	0.07	0.37	0.61	0.67	0.67	0.44	0.42	0.76	0.69	0.41	0.42	0.79	0.74	-0.12	-0.03	0.06	0.03	0.11	0.08	0.03	0.11	0.08	0.03	
入学時テスト(合計)	0.39	0.33	0.39	0.36	-0.04	0.62	0.90	0.67	0.67	0.59	0.60	0.60	0.74	0.40	0.61	0.62	0.72	-0.06	0.03	0.19	0.12	0.19	0.18	0.12	0.19	0.18	-0.11	

表3 大学1年次および2年次の成績と学修行動調査の結果および高校時の学修状況

	1年前期GPA	1年後期GPA	1年GPA	2年GPA	2年GPA - 1年GPA	学修行動(時間外学修)	学修行動(バイト時間)	高校評定値	高校欠席回数	大学欠席回数
1年前期GPA	0.66	0.66	0.89	0.66	-0.27	0.08	-0.10	0.46	-0.01	-0.43
1年後期GPA	0.66	0.66	0.93	0.66	-0.32	0.05	-0.15	0.23	0.01	-0.52
1年GPA	0.89	0.93	0.73	0.66	-0.33	0.07	-0.16	0.37	0.00	-0.53
2年GPA	0.66	0.66	0.73	0.66	0.41	-0.02	-0.14	0.30	0.04	-0.37
2年GPA - 1年GPA	-0.27	-0.32	-0.33	0.41	-0.12	-0.12	0.03	-0.08	0.06	0.20
学修行動(時間外学修)	0.08	0.05	0.07	-0.02	-0.12	-0.02	-0.02	-0.02	0.30	0.09
学修行動(バイト時間)	-0.10	-0.15	-0.16	-0.02	-0.12	-0.02	-0.08	-0.08	0.02	0.21
高校評定値	0.46	0.23	0.37	0.30	-0.02	-0.02	-0.08	-0.19	-0.19	-0.20
高校欠席回数	-0.01	0.01	0.00	0.06	0.30	0.30	0.02	-0.19	0.22	0.22
大学欠席回数	-0.43	-0.52	-0.53	-0.37	-0.20	0.09	0.21	-0.20	0.22	-0.11

表4 学生生活と松大ドリル結果(2019年度)

	単元 (国語)	単元 (数学)	単元 (英語)	単元 (合計)	プレテス ト(国語)	プレテス ト(数学)	プレテス ト(英語)	プレテス ト(合計)	ポスト テスト (国語)	ポスト テスト (数学)	ポスト テスト (英語)	ポスト テスト (合計)	学習回数	学習時間	英語達成 度	国語達成 度	数学達成 度	達成度合 計	ポスト -ブレ差
学修行動 (時間外学修)	0.00	0.00	-0.09	-0.04	0.06	0.14	-0.02	0.07	0.31	0.08	0.09	0.17	-0.13	-0.06	0.18	0.16	0.30	0.23	0.14
学修行動 (バイト時間)	-0.12	-0.11	-0.14	-0.14	-0.05	-0.05	0.02	-0.03	-0.06	0.07	-0.08	-0.03	-0.12	-0.12	-0.06	0.06	0.02	0.00	0.00
高校評定値	0.09	0.20	0.16	0.17	0.23	0.13	0.11	0.19	0.15	0.09	0.14	0.16	0.07	0.10	-0.14	-0.12	-0.07	-0.12	-0.06
高校次席回数	0.00	-0.14	-0.14	-0.11	0.13	0.05	-0.18	-0.02	0.02	0.05	0.08	0.07	-0.16	-0.16	0.15	0.10	0.21	0.17	0.15
大学次席回数	-0.19	-0.38	-0.35	-0.34	0.01	-0.08	-0.10	-0.08	-0.12	-0.11	-0.11	-0.14	-0.35	-0.34	-0.13	0.02	-0.11	-0.09	-0.09

(2020年度)

	単元 (国語)	単元 (数学)	単元 (英語)	単元 (合計)	プレテス ト(国語)	プレテス ト(数学)	プレテス ト(英語)	プレテス ト(合計)	ポスト テスト (国語)	ポスト テスト (数学)	ポスト テスト (英語)	ポスト テスト (合計)	学習回数	学習時間	英語達成 度	国語達成 度	数学達成 度	達成度合 計	ポスト -ブレ差
学修行動 (時間外学修)	0.25	0.18	0.11	0.17	0.24	0.18	0.22	0.28	0.26	0.14	0.30	0.29	0.10	0.03	-0.03	-0.05	-0.02	-0.04	0.09
学修行動 (バイト時間)	-0.05	-0.19	-0.14	-0.16	0.10	-0.08	-0.06	-0.02	0.01	-0.07	0.05	0.00	0.00	-0.11	-0.29	-0.22	-0.28	-0.30	0.03
高校評定値	-0.04	0.13	0.07	0.06	0.09	-0.03	-0.03	0.00	0.16	0.06	0.15	0.15	0.14	0.25	0.07	-0.03	0.08	0.05	0.17
高校次席回数	0.00	0.00	-0.01	-0.01	-0.11	0.01	0.02	-0.03	-0.16	-0.12	-0.19	-0.19	-0.08	-0.07	0.03	0.03	0.04	0.04	-0.18
大学次席回数	-0.36	-0.50	-0.60	-0.61	0.02	0.04	0.18	0.12	-0.29	-0.32	-0.14	-0.28	-0.19	-0.32	-0.58	-0.34	-0.48	-0.55	-0.41

表5 2020年度入試の結果

学部	学科	入学定員 A	志願者数	受験者数 B	合格者数 C	競争率 B/C	手続者数	入学者数 D	充足率 D/A
総合経営		90	576	564	128	440.6%	97	97	107.8%
	観光ホスピタリティ	80	443	432	108	400.0%	89	89	111.3%
	小計	170	1019	996	236	422.0%	186	186	109.4%

表6 学修行動調査の他の項目と松大ドリルの結果(2020)

	人数	学修回数	学修時間	プレテスト	ポストテスト	ポストテスト	ブレボス差	GPA	単元得点	年内合格者	年明け	達成度	全クリ人数	全クリ割合
男	72	48	1646	60.4	61.9	0.92	2.45					17	67	93%
女	25	43	141.8	59.6	61.2	1.62	2.61					16	21	84%
第一希望	51	53	181.9	58.1	59.3	1.33	2.55			47	4	17	48	94%
第一希望以外	46	41	132.3	62.6	63.5	0.84	2.44			18	28	17	41	89%
一人暮らし	24	43	138.4	61.8	60.1	-1.70	2.21					16	20	83%
実家暮らし	73	48	165.4	59.6	61.7	2.05	2.59					17	68	93%
指定校	50	50	170.1	58.2	59.6	1.38	2.45					17	44	88%
公募推薦	11	47	166.9	56.8	58.5	1.72	2.19					17	8	73%
総合型	4	39	172.3	55.2	54.2	-1.00	2.40					18	4	100%
一般	21	42	125.9	65.6	66.2	0.61	2.56					17	20	95%
センター	11	43	156.1	64.0	64.9	0.90	2.73					18	11	100%
普通科	64	47	160.0	61.7	63.2	1.48	2.56			34	30	17	61	95%
商業科	18	47	147.7	57.0	54.9	-2.05	2.20			18	0	16	13	72%
その他の学科	15	47	165.1	57.4	60.6	3.13	2.60			13	2	18	15	100%

(2019年度入学生の2年次GPA)

	人数	学修回数	学修時間	プレテスト	ポストテスト	ポストテスト	ブレボス差	1年次GPA	2年次GPA	単元得点	年内合格者	年明け	達成度	全クリ人数	全クリ割合
男	76	57	199.6	56.1	58.6	2.16	2.74	2.26					12	34	45%
女	28	65	263.3	60.9	65.1	4.12	2.33	2.56					14	19	68%
第一希望	52	66	248.8	55.2	57.2	1.96	2.31	2.21			46	6	13	30	58%
第一希望以外	51	53	188.1	60.9	64.4	2.69	2.59	2.48			15	36	12	23	45%
一人暮らし	31	55	197.6	58.6	61.1	2.48	2.48	2.45					11	12	39%
実家暮らし	72	62	227.8	57.6	60.4	2.77	2.43	2.3					13	41	57%
指定校	49	75	282.2	54.5	57.3	2.79	2.38	2.2		1261			13	29	59%
公募推薦	10	37	108.5	51.4	51.4	-0.20	1.97	1.98		748			7	2	20%
AO	3	20	59.9	60.0	61.3	1.33	2.31	2.11		699			7	1	33%
一般	23	55	190.2	63.3	66.6	3.23	2.72	2.61		1346			14	13	57%
センター	18	43	180.7	64.4	66.5	2.12	2.54	2.61		1083			12	8	44%
留学	1	2	44	42.0	68.0	26.0	2.53	2.22		130			1	0	0%
普通科	70	53	194.8	59.1	61.6	2.41	2.51	2.4		1138		36	12	33	47%
商業科	11	89	322.1	54.7	55.4	0.72	2.27	2.35		1380		0	15	9	82%
その他の学科	23	63	233.2	55.3	59.7	4.40	2.33	2.15		1178		5	12	11	48%

あったが、2020年度は男女学生間に特に差があるようには見えなかった。

図16は2019年度入学生の各区別のGPAの分布である。1年次のGPAと2年次GPAの間には相関があるので、図16は大体正比例の直線の周りに分布している。また、本学科ではGPA標準化を行っていないので、1年次と2年次のGPAの高低は各科目の採点法に依存し、全体としての上昇下降に特別な意味はない。全体の傾向として2年次科目の方が厳し

い採点となっておりGPAは低めに出ている。しかし集団間の比較において、相対的な増減を考える分には統計的な意味がある。

男女別では女子学生が男子学生に比べて高く高得点領域に多く分布している。入試区別では一般、センター利用での入学者が高得点領域に分布している。指定校入学者は全体的にGPAが低い、斜めの直線から離れた、大きく伸びた学生と大きく力を落とした学生がいる。志望別では、第一希望ではな

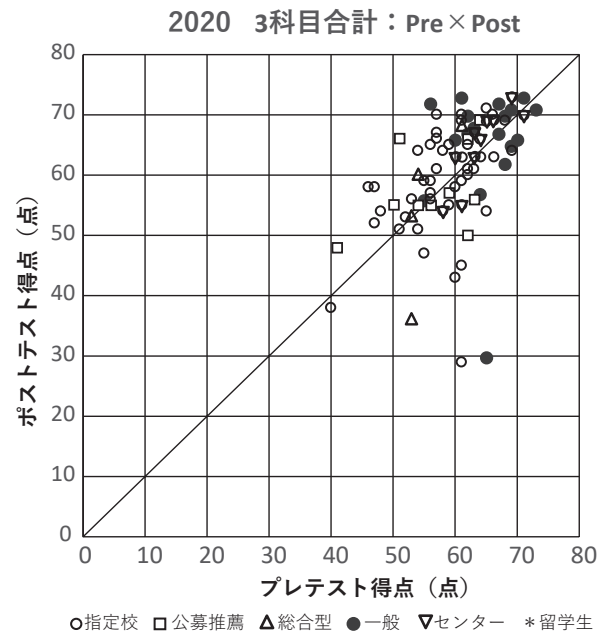
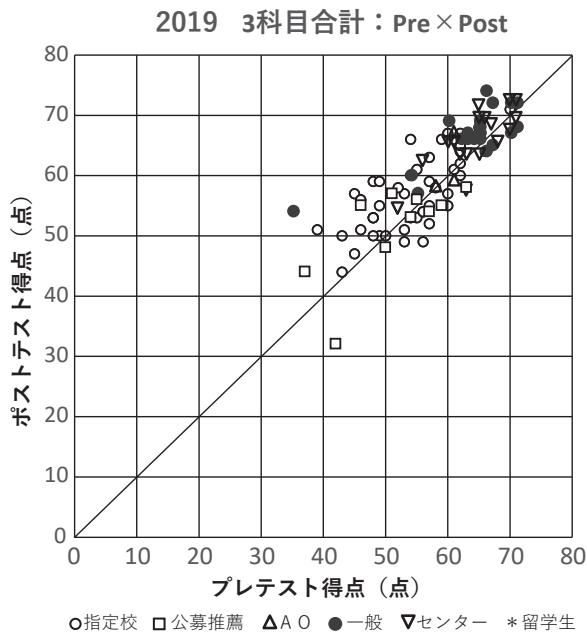


図11. 入試区分と学力テスト結果(2019)

(2020)

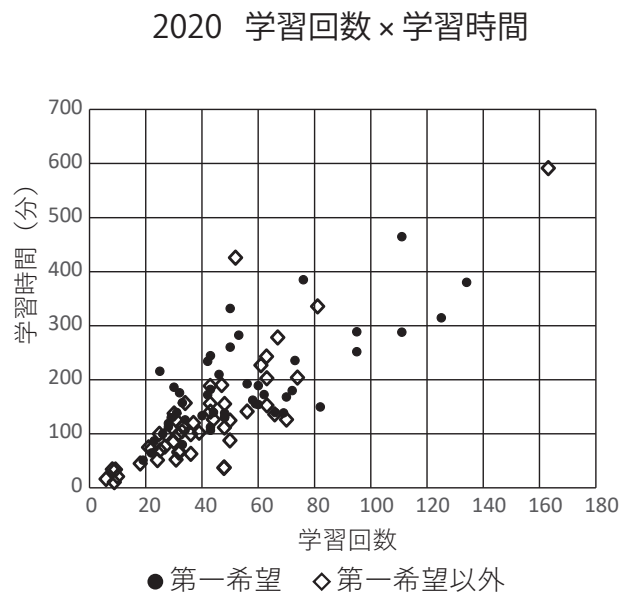
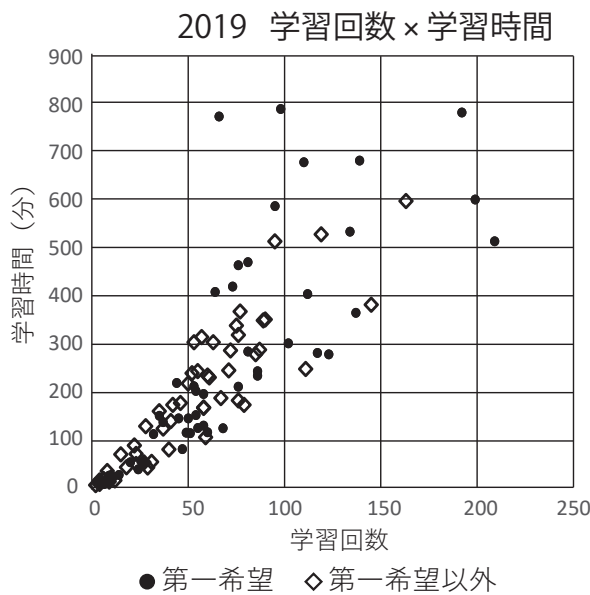


図12. 希望別学習回数と時間(2019)

(2020)

かった学生のGPAの高さが目立つが、本学を第一希望とする学生の内、低GPA領域に1年次から2年次にかけて大きくGPAを増加させた学生が存在することは、入学意識の高さが入学後の学修につながった可能性を示唆する。

また、その逆に、第一志望でない学生でGPAを落とし学生が存在(図中央下側)には、注意が必要であり、学修意欲を向上させるようなアプローチの必要性を示唆する。高校の課程別のグラフからは、課

程の相違による特徴的なGPAの上昇・下降は見られない。商業科出身者の分布の広がり目立つが、この学年の特徴かもしれない。

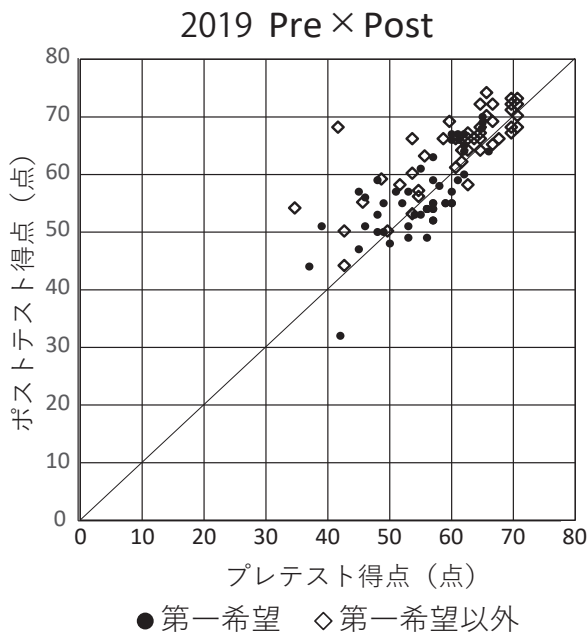
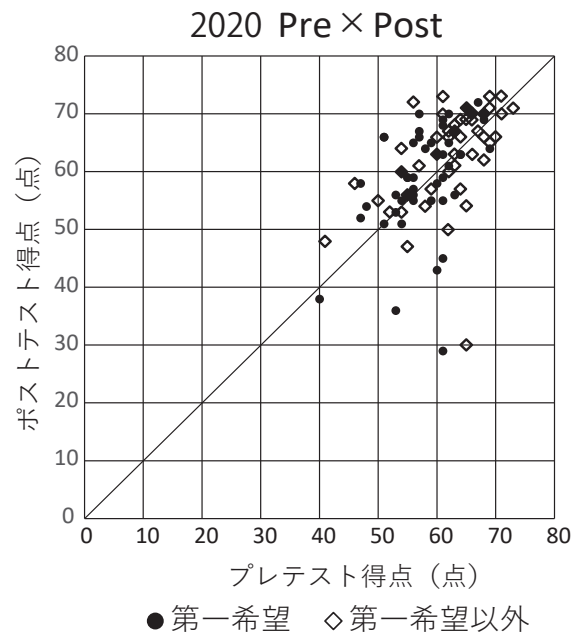


図13. 希望別プレ・ポスト得点(2019)



(2020)

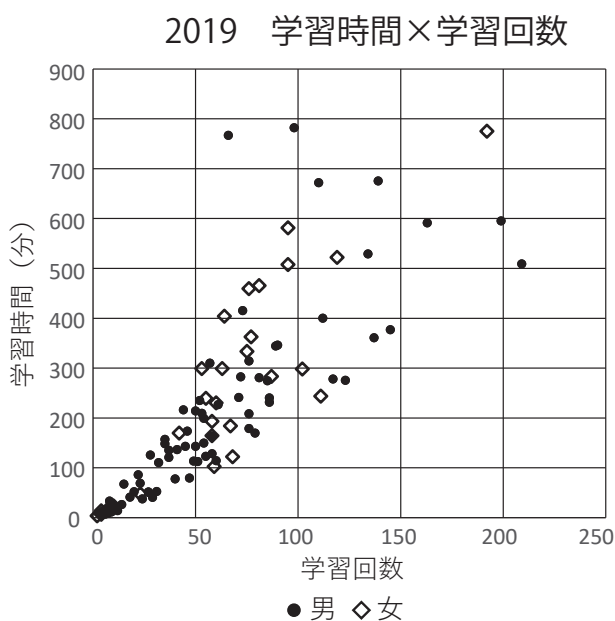
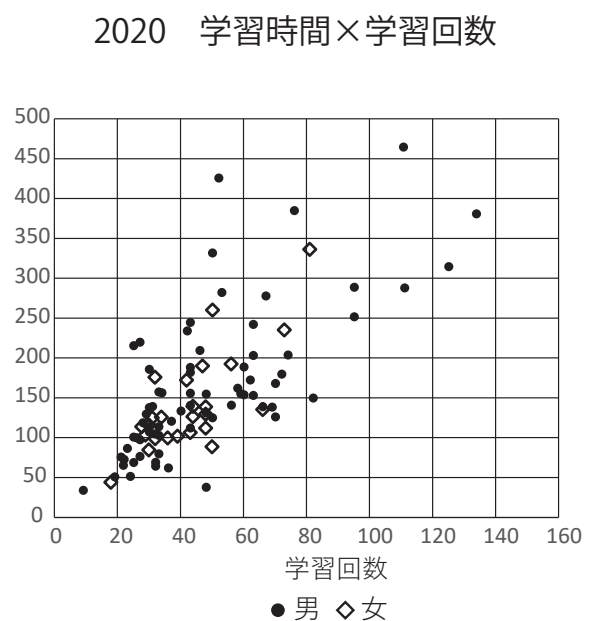


図14. 男女別学習回数と時間(2019)



(2020)

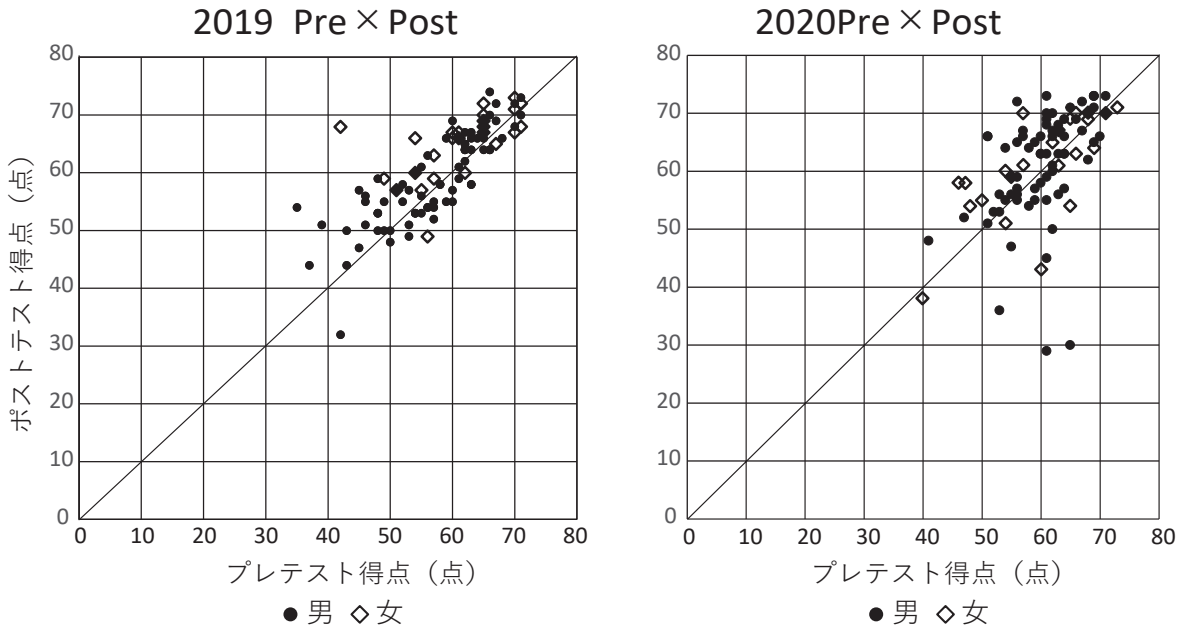


図15. 男女別学力テスト結果(2019)

(2020)

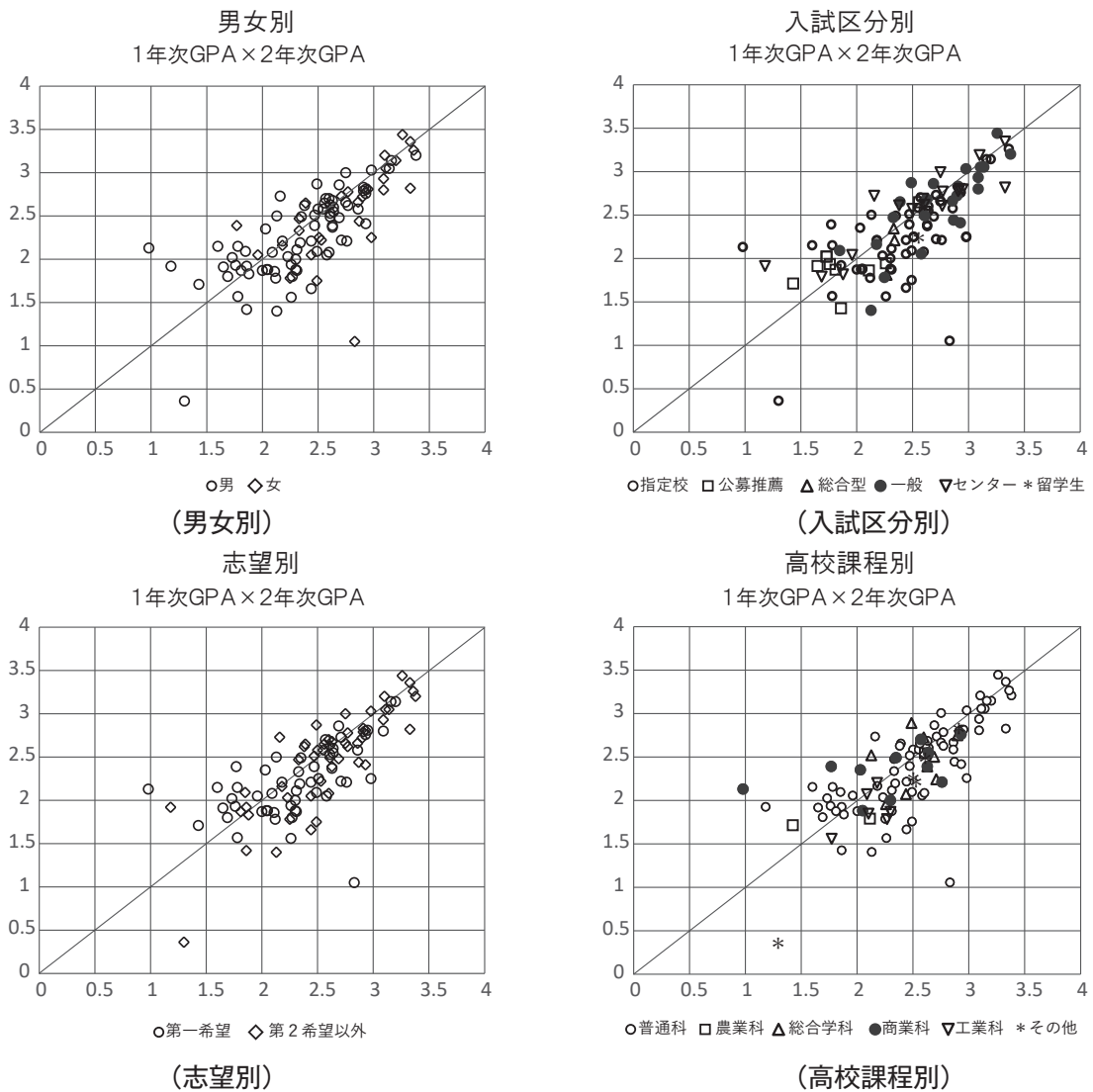


図16. 区分別GPA比較

V. まとめ

本稿では、総合経営学科教育企画として1年生に対して2018年度より導入している教養教育のためのe-learningシステム「松大ドリル」の結果を報告した。学生に対しては3教科の各分野の実力診断テストでの80点以上獲得を目標として、「平常点の一部(20%程度)に組み込む」という指示のみ行い、基本的に授業外での学生の自主的な学習にゆだねている。

利用実績は、2019年度は教科によるバラツキはあるものの、概ね60~70%の課題達成率を示したが、2020年度では、すべての教科、すべての分野において90%以上を達成した。e-learningシステム導入時に最も問題になるのは、学生の利用率でありこの点に関しては、十分な実績であった。

年度初めと年度末に行った2回の学力テストの比較では2020年度の英語がポストテストにおいて微減であったもののプレテストの段階の得点はすべての教科で高く学力向上の意味では望ましい結果であった。また、この年は新型コロナウイルス感染症対策で大学授業は前期期間すべてオンラインとなり、毎年新生生に行っている3教科のプレースメント用の学力テストも全学的に中止となったが、本学科はe-learningのプレ・ポストのテストをオンラインで実施した。2019年度の結果を見る限り、学力テストとプレ・ポストテストの間で、各教科間の相関は高く、必要に応じて代替できる可能性がある。

これまで本学科学生の不得手科目だと思われた国語以外の科目についての取り組みを促すために、ドリルは将来就職につながるSPI対策にもなること、期限内に一定の課題を終了させるという態度は社会において重要となることなどを基礎ゼミの場で告知することなどは、課題への取り組みを促進させるポイントとなる可能性も示唆された。

IRの一環としては、大学の成績、入試区分、松本大学学修行動調査などとGPAの関係の検討も行った。2019年度では基礎学力の高い、本学に第一希望ではなく進学してきた学生が入学後も順調に学力を伸ばしGPAも高かったことから、第一希望ではなかった大学での学修意欲の維持という点で喜ばしい結果であったが、この傾向は2年次のGPAでも同様であった。その一方で2020年度新生生に関しては、1年次GPAの結果は第一希望の学生と非第一希望の

学生とで高低が逆転している。値自身は第一希望の学生のGPAが上昇し第一希望以外の学生のGPAが低下している。GPAはプレ・ポストの点との相関は高くはないが、基礎学力の高低と逆転した結果となっていることは、第一希望ではなかった「不本意入学」の学生に対するアプローチに工夫が足りなかった可能性がある。

大学の教育には3ポリシーが定められており、アドミッションポリシーに合った学生を入学させて、ディプロマポリシーを満たして卒業することを目指して、カリキュラムポリシーに沿って育てることが大学のミッションとなっている。実際にはその外側に、種々の高校の課程があり、多様な学力の学生の入学という背景があり、卒業後の社会生活の重要な要素である就業とそれを目指した就職活動がある。

大学入学前の基礎学力のリメディアルや、就職活動に現在密接に関係づいているSPIテストは大学の3ポリシーには明示的には関わり合いのないレベルのものであるが、学生を育てる大学にとっては必要なファクターである。本プロジェクトは図17の中では、高校と大学をつなぐアドミッションの期間でアドミッションポリシーや入学学力考査ではカバーしきれない部分をカバーするものと考えられる。理想的には大学教育としてのゴールはディプロマポリシーとそれを担保する卒業研究であろうが、希望の職業選択や希望の就職をして社会人として活動することは、学生個人・社会のどちらをステークホルダーと考えるても大学のゴールを示す重要な要素である。

図17にあるように現在使っているe-learningシステム「松大ドリル」にはSPI練習部門もあり、2019年度入学の学生が2021年度秋からこの部分の利用を開始する。SPIはディプロマポリシーと直接的に関係するものではないが、現在の就職活動で広く使われており、“希望の就職”や社会人として“希望する分野での活躍”を実現するためのツールである。大学にとってのステークホルダーを誰だと考えるかはいろいろな意見があるであろうが、学生が育ってきてそして学生が卒業後に活躍する社会全体と考える立場もあり⁴⁾、従来からの狭義の“大学教育”のみならず、学生と社会のマッチングを意識したステップは必須である。従って大学入学以前の多様性による学生の散らばりを緩和する基礎学力学修と、就職に

向けたSPIは大学とその前後の接続をシームレスにするツールとして無視できない重要な要因となる。本教育企画は図17のような形で、大学教育全体の中での一つの道標としてこのe-learningシステムとその測定データを活用していくことを考えている⁵⁾。

本稿の報告は、2019年度と2020年度の結果であり、あまり詳細を穿ちすぎることが慎むべきであって、考察は経年変化を見ていくことが重要であろうと思

われる。教育企画に協力していただいた、総合経営学科の「基礎ゼミ」担当教員チームの皆様には感謝したい。本研究は松本大学研究倫理委員会の審査を経ている。

本共著論文において、データの分析は上條が行い、得られたデータに対する考察は矢崎が行った。室谷は企画全体の統括と論文の監修を担当した。

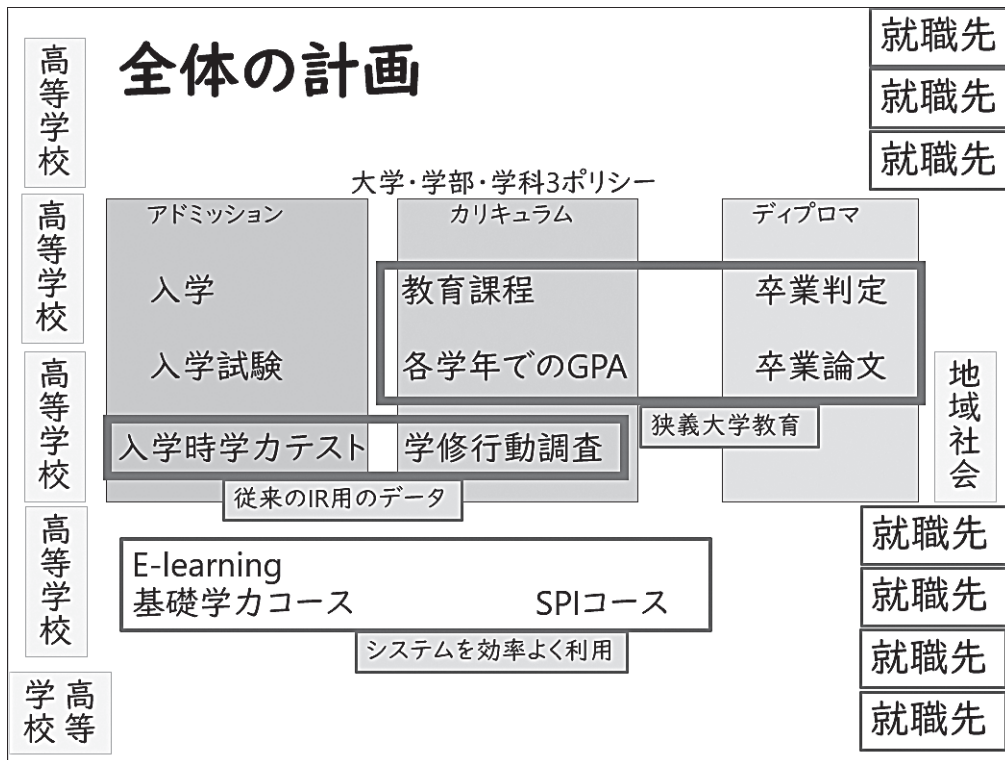


図17. 本プロジェクト全体の構成

注

^{注1} 本ノートでは、松大ドリルによる具体的な活動を学習とし、学生の一般的な学びを学修と表す。e-learningシステムの利用回数や利用時間は学習回数、学習時間であり、学生の成長は学修である。

文献

- 1) 基礎ゼミナール I・II シラバス
https://portal.matsu.ac.jp/mfufg_s2/view/Syllabus12300.xhtml 及び
https://portal.matsu.ac.jp/mfufg_s2/view/Syllabus12310.xhtml (2020年9月15日閲覧)
- 2) 室谷心, 上條直哉, 松本大学教育総合研究 Vol.4, pp129-140(2020).
- 3) https://www.education.jp/education02/education02_1/ (2020年9月15日閲覧)
- 4) 原忠之, 早稲田学報, 2010.10, pp.28-32(2010).
- 5) 室谷心, 上條直哉, 日本教育情報学会第37回年会IR研究会講演, 2021年8月28日.